

「唐古・鍵遺跡と田原本」

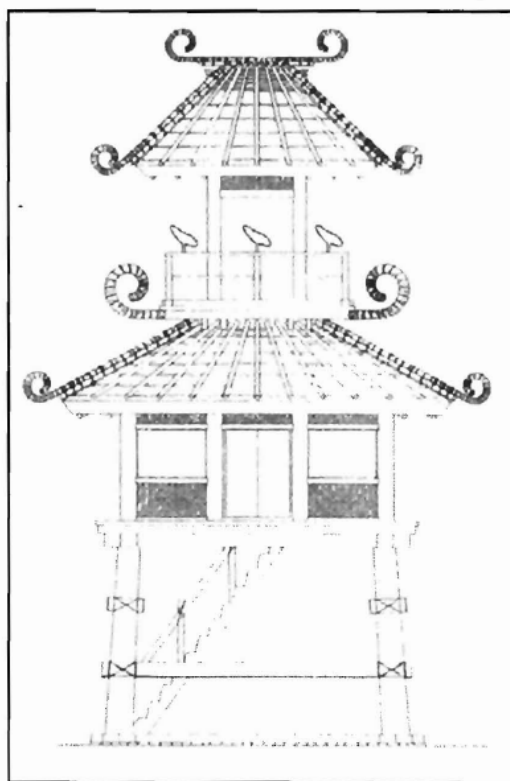
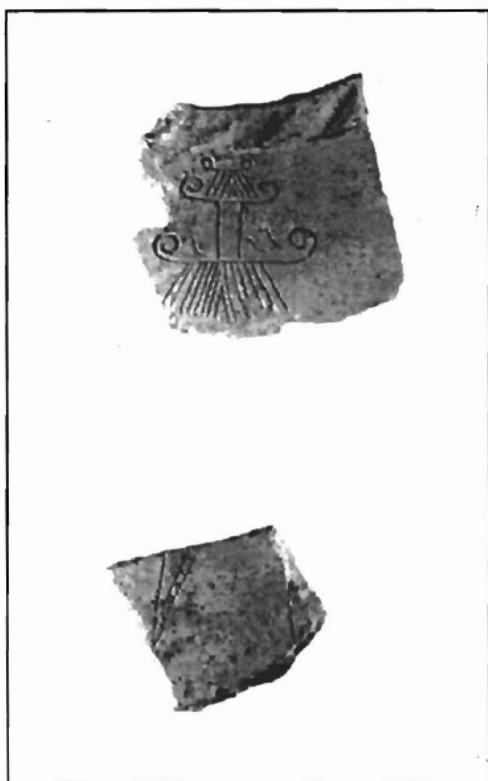
担当：井守徳弘

日時：5月16日(日)午前9時15分

集合場所：近鉄学園前駅北口改札前

(コース)近鉄学園前駅-西大寺駅-田原本駅-津島神社-楽田寺-唐音・鍵考古学ミュージアム(昼食)-唐古・鍵遺跡-八坂神社(田中荘跡)-鍵の蛇巻き-今里の蛇巻き-杵築神社-今里の浜-安養寺-鏡作神社-平野氏本陣屋跡-本誓寺-浄照寺-田原本駅-西大寺駅-近鉄学園前駅

(解散：5時ごろ)(徒歩距離：約6km)



●津島神社

祭神は素盞鳴命、櫛名田姫命で、神仏分離以前には祇園社と云われました。『奈良県磯城郡誌』に平野氏が当地に藩邸を構えるに当たって、平野家の本貫地の尾張国津島（愛知県津島市）にあった津島社の神社号を移して津島神社と改称したとあります。

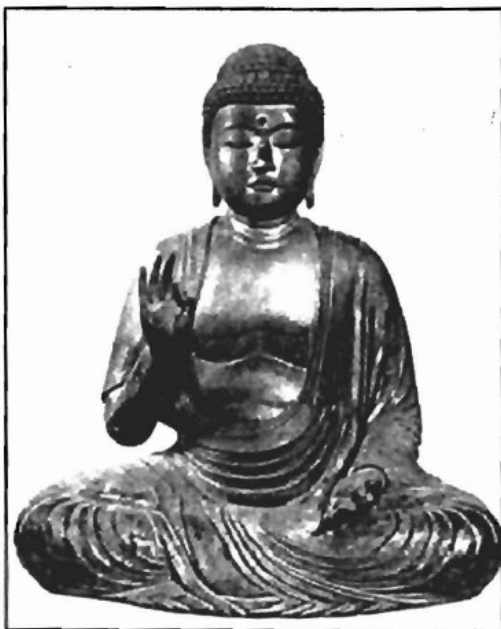
明治末書写という平安時代後期の天治 2 年（1125）の棟札に建立の文字があったとされることから、当社の創紀の古さを推察できます。領主平野家は累代崇敬篤く、年々米一石五斗（225kg）宛寄進をしたといえます。

京都の祇園本社にならって旧暦 6 月 7 日から 14 日まで夏祭りが行なわれてにぎわったと伝えられ、境内で浄瑠璃も催されていたという。あたかも江戸時代後期の嘉永 7 年（1854）の大地震が浄瑠璃奉納中で参詣者が大混乱したと伝えている。大和郡山藩での記録に嘉永 7 年（1854）6 月 13 日昼九ツごろ（午後 0 時ごろ）に地震がはじまり、夜にかけて 5-6 度、翌 14 日夜八ツ時（午前 2 時ごろ）にも大きくゆれ、15 日の朝六ツ半ごろ（午前 7 時ごろ）また大きくゆれ、城中はもちろん、町屋は倒壊が多く、地割れして泥水が湧き出るといった状況であったとあり、ここ津島神社でも多くの被害が出たと思われます。

●融通念仏宗楽田寺

津島神社の神宮寺で、寺伝では、草創が天平元年（729 年）とか。本尊木造十一面観世音菩薩は長谷寺の本尊の御衣木（みそぎ）を以て作ったと云われ、弘法大師もここに来て真言の道場とし、中世興福寺の末寺で田原本寺と称し、鎌倉時代末期の元亨 2 年（1322）僧の実祐が雨乞いの祈祷をしたら効き目があったので号を雨宝山とし、この時に描かれた絹本著色善女龍王が今もあります。なお、最も勢力のあった室町中期には二十数坊を数え、江戸時代前期の貞享 2 年（1685）融通念仏宗に改め、本尊阿弥陀如来を安置しました。

善女龍王図は、龍王が雷神・雨神を伴い、上方には十一面観音像、下方には弘法大師坐像を配する。雨乞い祈願に用いられた。



木造阿弥陀如来坐像



絹本著色善女龍王図（室町時代）
縦（現状）196.7cm 横 104.5cm

●唐古・鍵考古学ミュージアム

唐古・鍵遺跡（国史跡）は、日本を代表する弥生時代の遺跡として知られ、発見から 100 年以上にわたって調査が続けられてきました。

特に末永雅雄氏らによる、唐古池の発掘調査（第 1 次調査）は、弥生集落の様相が初めて明らかとなり、その後の弥生時代研究の確固たる基礎を築きました。その後も、奈良県立橿原考古学研究所・田原本町教育委員会によって調査が続けられ、日本最大級の環濠集落であることが明らかとなりました。また楼閣を描いた絵画土器や、勾玉を入れた褐鉄鉏容器、大型建物跡など重要な発見も多く、今なお唐古・鍵遺跡は、弥生文化を考える上で重要な位置を占めています。

唐古・鍵考古学ミュージアムは、2004 年 11 月 24 日、田原本青垣生涯学習センター内にオープンし、これまでに出土した膨大な資料の一部を展示しております。会場ではボランティアさんの案内により館内を見学していただきます。

第 I 部唐古・鍵の弥生世界

第 1 室・第 2 室では、唐古・鍵遺跡の出土品を中心に展示しています。展示室は唐古・鍵ムラの環濠をイメージしてレイアウトされ、第 1 室には環濠外部の世界が、第 2 室には環濠内の世界が展開します。

【第 1 室】

第 1 室は、環濠外部をイメージし、ムラ周辺の環境と生業活動、周辺地域との交流や戦い、死やカミへのいのりをテーマとしています。特に第 1 室の中央には、絵画土器を参考に製作したシャーマンの模型を展示し、まつりの場面を再現しています。またエントランスの床下には、大型建物跡の発掘現場を復元しています。

【第 2 室】

第 2 室に入ると、壁面の大型三面スクリーンに唐古・鍵ムラの遠景が映し出されます。映像は、ゆっくりとムラの中に降りていき、環濠の内部へといざなわれます。ムラの中をイメージした第 2 室では、土器・木器・青銅器・石器や機織りなど、弥生時代の手工業生産をテーマとしています。展示された製作途中の遺物からは、弥生時代の高い技術水準を知ることができます。

第 II 部田原本のあゆみ

【第 3 室】

田原本の約 1 万年にわたる歴史を、考古資料を通じて概観します。特に古墳時代の埴輪には優品が多く、重要文化財に指定された「牛形埴輪」は目を引きまします。また田原本在住で、人間国宝（重要無形文化財保持者）に認定された吉田文之氏の作品「撥鏝（ばちる）」も展示しています。

●唐古・鍵遺跡

唐古・鍵遺跡は、弥生時代の大環濠集落である。現在の水面下約 50cm に 2 千年前の生活に関する様々な遺物が眠っている。1936～37 年に行われた唐古池の発掘調査は弥生時代研究の基礎をつくった。昭和 50 年代から調査は再開され、現在調査は 100 次以上に及んでいる。発掘調査では、集落を囲む環濠や竪穴住居、井戸、青銅器の工房跡、木棺墓などが検出されている。

また、多量の土器や石器のほか、楼閣などの絵画土器、岡山県東部や静岡県西部からの搬入土器、青銅器の鑄造に伴う鑄型など弥生時代でも貴重な遺物が多い。特に絵画土器は、唐古・鍵遺跡とその分村である清水風遺跡の 2 遺跡で、全国の画土器出土総数の約半分を占める。

遺跡には、楼閣の絵画土器をもとに復元した楼閣を唐古池上に復元している。出土遺物は、唐古・鍵考古学ミュージアムに展示されている。

田原本町教育委員会文化財保存課作成の『国史跡唐古・鍵遺跡』パンフ参照。

弥生時代前期

遺跡北部・西部・南部の小高い丘に居住域が形成される。居住区域から多数の鍬や鋤の農耕具、斧の柄などの工具、高杯や鉢などの容器類の各種未製品の木製品が多数検出された。この期の石包丁の石材は遺跡の南方 6km にある耳成山からの流紋岩であった。

弥生時代としてはもっとも古い総柱の大形建物跡（梁行き 7m、桁行き 13.4m 以上の南北棟建物）が検出されている。

・弥生時代中期

中期初頭には 3 か所の居住域周辺に環濠が巡らされる。西部居住域で大型建物の建築。

中期中葉には 3 か所の居住域の周りに大環濠を掘削し、一つの居住域に統合する。（長径約 500m、短径約 400m の不整円形）環濠は 4～5 重に巡らされる多重環濠でした。西南部に河内や近江、紀伊など各地の搬入土器が多く出土し、南部では木器の未成品や青銅器鑄造関連遺物や炉跡、北部ではサヌカイトの原石や剥片が纏まって出土する所などがあり、各種工人の居住の場所とされる。

中期後半は楼閣などの建物・動物・人物の絵画を土器に描く風習の確認されています。洪水により環濠が埋没してしまいました。

・弥生時代中期弥生時代後期

洪水後に環濠再掘削が行われ、環濠帯の広さも最大規模となる。集落南部で青銅器の製作がされています。

・古墳時代前期

集落の衰退してゆきます。大環濠の消滅し、井戸などの遺構が減少していることから、居住域が規模が縮小しています。

・古墳時代後期以降

遺跡中央部に前方後円墳が造られ、墓域となっています。集落が消滅してしまいました。

中世には唐古氏・唐古南氏・唐古東氏の居館がつくられる。

江戸時代には唐古・鍵池が造られ、遺跡周辺が水田となりました。

●八坂神社（田中荘跡）

穀豊穰と村人の無災を祈るために行われる古典味豊かな神事華鎮祭（けいちんさい）が 2 月の第 4 日曜日に行なわれます。

弓矢で悪霊をうちすくめ、その年の安泰を祈り、稲作の豊かである事を願う行事。神事では神主の祝詞奏上に続いて華鎮祭文が読み上げられ、まずは神主が梅の弓に女竹の矢を番えて射る。次に五人組の若者が各 9 本ずつ矢を射り、皆射終わると参詣者は的を木っ端微塵に打ち破り、取り合いを演じる。その破片を各自家に持ち帰り、災難除けや蛇除けのまじないとして神棚に配る。

この辺りは、平安時代に大和国城下（しきげ）郡東郷田中荘で、『源氏物語』の作者紫式部の夫、藤原宣考（よしのり）の荘園でした。彼は、平安時代中期の官人で、父は権中納言藤原為輔、母は参議藤原守義の娘。官位は左衛門尉、六位蔵人、判官代、筑前守、右衛門佐・兼山城守に任じられ、999 年（長保元年）46 歳の時、又従姉妹（またいとこ）の紫式部 29 歳と結婚し、同年末か翌年に娘・賢子（たかこ）が誕生。1001 年（長保 3 年）山城守正五位で没。なお、田中荘は、後に興福寺の荘園でした。

●鍵の蛇巻き（下り龍・降り龍）

鍵では、午前中八坂神社にて稲わらで蛇をつくる。午後からは 1 年の間に鍵大字内で祝い事のあった家々を、蛇を担いで訪ねる。200 キロ近い頭を 17 歳の少年と当屋と一緒に担ぎ、後ろの綱を参加した全少年が頭の前進を阻むよう引っ張り合いながら道を進んでいく。最後に、北中学校の前の「はったはん」という場所の大樹の根元に頭がおかれ、胴体が上へと樹に吊るされる。

●今里の蛇巻き（上り龍・昇り龍）

今里の杵築神社では、午後 1 時過ぎに中学生以上の男子が麦わらを束ねて、全長 18m の蛇を作る。行事参加者が拝殿でお神酒を飲む間、村の参拝者にはわらの先にくくられた「わかめの味噌煮」が配られる。余れば、観光客にもおすそ分けがある。甘く美味。その後、中学生（本来は数えて 15 から 17 歳）の男子が蛇頭を抱え、今里の各戸を「おめでとう」と言いながら練り歩く。広い道に至れば、「それ」との掛け声とともに、蛇体に人を巻き込む。子供たちの笑い声が上がり、実に楽しい。蛇は再び杵築神社に戻り、神社南側にある大樹に頭を上へ巻き付けられる。

●今里の浜

今里の浜は、江戸時代の川港で、倉庫をもつ問屋があった。当時は大和川を川船が往来し、寺川域では今里まで遡上した。その川港は、通称「浜」と呼ばれた。春は大阪から油粕・干鰯（ほしか）などの金肥（金銭で買い入れる肥料）のほか塩や雑貨が上がり、秋は大和の農産物や特産物が下っていった。

今里の浜は、田原本の荷物を主に扱い栄えたが、明治に鉄道が敷設され物資の輸送形態が変化すると廃れた。今は今里の浜の往時をしのぶものは何もない。

●安養寺

法性山(ほうしょうざん)権求院と号し、浄土宗。本尊、阿弥陀如来。寺伝は奈良時代行基の開山で、一創建は、1633年(寛永10年)源蓮社宝誉上人、なお、現在は「寺川」の西岸に位置しているが、元は川の東側で浄国寺と称し、元禄年間(1688~1704)氾濫で移ったといわれています。この元の寺の浄国寺にあった秘仏阿弥陀如来立像が本尊となっています。

足柄には「巧匠阿弥陀仏」の墨書があります。壮年期の快慶の作で、国重要文化財になっています。毎年5月15日には開扉されています。

像は、玉眼・粉溜塗の特徴をもつ。粉溜とは、白土を下地にその上に金泥を塗ったものである。快慶が好んで用いた手法。X線写真によると、眼の奥に蛇腹状の文様が映っている。これは玉眼を入れるための工法によるもので、快慶仏には時々この手法が認められるという。

京都北区にある遺迎院(けんごういん)にある阿弥陀像にも足に「巧匠安阿弥陀」の記述があり、快慶の作といわれています。

快慶の作品には時代により違いますが仏師快慶・巧匠安阿弥陀・巧匠法橋快慶などの署名があります。



阿弥陀如来立像



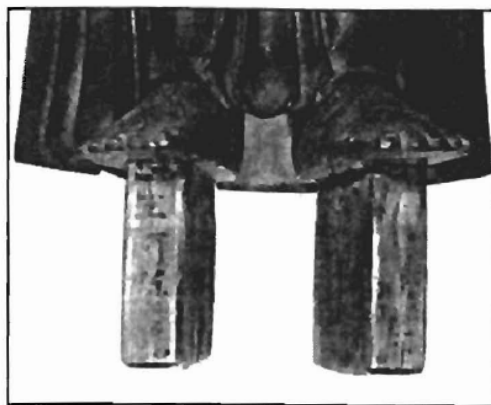
側面



正面からのお顔



左足柄(ほぞ)側面



両足柄正面

●鏡作り神社

鏡作り坐天照御魂神社は、田原本町八尾に鎮座する延書式内大社で、『和名抄』鏡作郷に鎮座する。祭神は天照国日子火明命、石凝姥命、天児屋根命で、古来から鏡鑄造の神として信仰された。このうち石凝姥命は、天照大神の御魂の神爾の鏡として内待所に祀る鏡を鑄造したとされる神で、社伝ではその試鑄の鏡が鏡作神社のご神体であると伝える。

神社の本殿は、桁行 7.55m、梁行 1.64mで、東面した 5間社流造である。本殿 3社と2つの合間から成る。江戸時代中期頃の建築と考えられるが、詳細は不明である。

この神社では、毎年 2月下旬に御田植祭が行われる。お田植舞、豊年舞、牛使いが行われ、近隣の氏子でにぎわう。牛使いが乱暴にすると慈雨に恵まれるという。

なお、社宝として三神二獣鏡が伝えられるが、これは三角縁神獸鏡の外区が欠落したものと考えられる。

末社には、鏡作伊多神社(宮古・保津)、鏡作坐若宮神社(八尾)、鏡作麻気神社(小阪)などがある。



ご神体唐草文帯三神二獣鏡

●平野氏本陣屋跡

平野氏陣屋跡は、現在の田原本町役場からその南に、東西約 100m、南北約300mの敷地範囲をもつ。陣屋は、賤ヶ岳の七本槍の一人である平野長泰が拝領した田原本村の地に、その二代日長勝が寛永 12年(1635)に着工した。

長勝は、当時の田原本で寺内町形成を進めていた浄土真宗の教行寺を正保四年(1647)に著尾へ引払わせ、陣屋を慶安元年(1648)に竣工させた。

陣屋葉、明治 4年の廃藩置県まで平野氏支配下の行政中枢施設として役割を果たした。平野氏陣屋跡は、周辺の市街化が進み、水路と路地がその地割を伝えるのみである。

・平野権平長泰

平野権平長泰は、天正11年(1583)4月21日、賤ヶ岳において、加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、脇坂安治、糟屋武則、片桐且元等と共に戦功を挙げ、七本槍の名声を博することになった。秀吉の目の前での手柄で、他の 6人と共に激賞された。

この時の恩賞は、福島正則が高名一番と讃えられ、5千石、長泰をはじめ他の勇士は 3千石を与えられた。

賤ヶ岳の戦いは、織田信長の死後の羽柴秀吉と柴田勝家の争いで、秀吉の天下決定付けた重要な戦いともなりました。

平野長泰は、翌年四月の小牧長久手の戦いでも武功を上げ、文禄 4年(1595)には二千石を増され、大和田原本で五千石を領することになりました。そして慶長三年 (1598)には、豊臣の姓を授かり、従五位下遠江守を叙任されます。

しかし、長泰の出世はここでピタリと止まります。七本槍の加藤清正、福島正則、加藤嘉明らが十万石以上の大大名と成る中で、長泰一人が取り残されてしまいました。原因は諸説あり、伝わっているほどの武功が無かった、『太閤記』の記述で性格が猛しいので秀吉に疎んじられたなどです。

慶長 5年 (1600)関ヶ原の戦いで、平野長泰は徳川家康の東軍に味方しました。役後の論功行賞でも、加藤清正、福島正則が大封を得たのに比べ、本領の大和田原本五千石を安堵されただけですから、大した活躍が無かったようです。

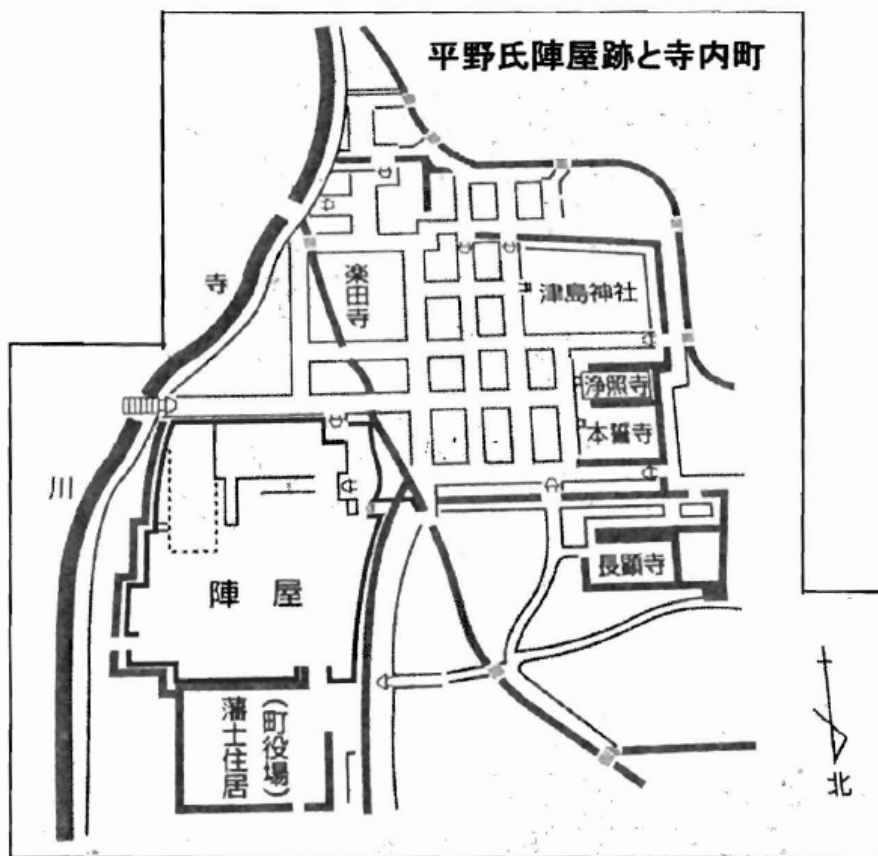
徳川の治世になると、長泰は駿府城近くの安西に屋敷を与えられ、家康の安西衆 (御伽衆)の一人となり家康の死後も二代将軍秀忠の御伽衆を勤めました。

長泰は寛永5年(1628年)5月7日、安西の地で、70歳の天寿を全うしました。

平野家はその後も存続して、五千石の交代与力として幕末まで続きます。交代与力とは旗本と異なり、諸大名並の待遇を受けますが、一万石以下で参勤交代の義務がある分、同録の旗本より経営は大変だったと思います。

慶応 4年(1868)7月、当代平野長裕のときに、実収入一万一石八斗となり、田原本藩が成立したので、初代長泰が大和田原本五千石を拝領してから 272 年後に、待望の大名になることが出来ました。

しかし、それもつかの間の名誉です。明治 4年 (1871)、廃藩置県で廃藩となると、田原本は奈良県に編入され消滅し、三年間の大名で終わってしまいました



歴代田原本領（藩）主略譜

- 初代 長泰
権平
- ・ 平野長治の三男。父長治は尾張津島に任し、織田信長及び豊臣秀吉に仕えたが、慶長11年（1606）没。長泰は天正7年（1579）秀吉に仕え、同11年、賤ヶ岳七本槍の勲功を挙げた。京伏見・寶塔寺を再興。文禄4年（1595）田原本領主（5000石）となる。慶長3年（1598）「豊臣姓」を拝され、従五位下遠江守に叙任。関ヶ原役、東軍に属する。田原本の町を開く。慶長17年（1612）二条城修築拝命。大坂両陣のとき江戸城留守居を務める。寛永5年（1628）没。70歳。
- 2代 長勝
権平
- ・ 寛永5年遺跡継ぐ。寛永12年（1635）田原本陣屋築造。田原本浄照寺・本誓寺建立。甲府勤番・駿府加番を務める。父母の菩提を弔い、伏見寶塔寺の客殿・庫裏を再建。田原本長頭寺開基。寛文8年（1668）没 66歳。
- 3代 長政
- ・ 父は長沢氏、長勝の銀子となる。従五位下丹波守に叙任。寛文9年遺跡を継ぐ。江戸定府帝鑑間詰。駿府加番・天和2年（1682）朝鮮通信使の饗応役を務める。元禄13年（1700）没 59歳。
- 4代 長英
右衛門
- ・ 父は長政、元禄13年遺跡を継ぐ。本誓寺に寺領50石寄進。二代長勝公の霊廟を建立。伏見寶塔寺に平野家石廟を建立し、先祖の法要を勤める。享保5年（1720）没 37歳。
- 5代 長暁
権平
- ・ 平野九左衛門の三男。長英の養子となる。享保5年 遺跡を継ぐ。延享元年（1744）没 54歳。
- 6代 長里
主水
- ・ 内田信濃守の三男。長暁の養子となる。寛保3年（1743）遺跡を継ぐ。宝暦6年（1756）大番投を務める。従五位下遠江守に叙任。京都二条城在番も務める。寛政元年（1789）没 74歳。
- 7代 長純
中務
- ・ 父は長里、安永7年（1778）遺跡を継ぐ。文化6年（1809）没 65歳。
- 8代 長興
権平
- ・ 父は長純、文化3年遺跡を継ぐ。文化4年、初代長泰公の勲功を偲びその功業を、宝蔵「永久殿」額に記して、家中の戒めとした。文政11年（1828）、数寄屋橋郭門の守衛に就く。弘化4年（1847）没 66歳。
- 9代 長発
権平
- ・ 父は長興、文政12年遺跡を継ぐ。駿府城加番を務める。陣屋に撃劍所書手を増築、家中子弟の訓練に励む。能筆家で、浄照寺に「真解説」額が遺る。嘉永6年（1853）没 40歳。本誓寺霊廟に葬る。
- 10代 長裕
内蔵助
- ・ 父は長発、嘉永7年 遺跡を継ぐ。天誅粗蜂起、出兵要請を受ける。赤坂郭門守衛等を務める。明治元年（1868）10001石大名に列する。京養栗田口警衛に就く。明治2年従五位下遠江守に叙任。田原本藩知事。学問所沢善館を領民子弟に開放。明治4年廃藩置県、知事を辞職。明治5年没 28歳。

●古文書

平野権平宛羽柴秀吉判物



古文書
平野権平宛羽柴秀吉判物

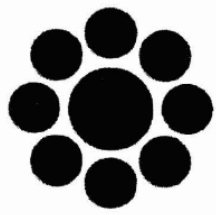
今度三七殿依謀叛、濃州大柿令居陣候処ニ、柴田修理亮至柳瀬表、變出候条、為可及一戦一騎懸馳向候之処ニ、心懸深付而、早懸着ニ而秀吉於眼前合一番、其勤無比類候条、為褒美三千石宛行訖、彌向後奉公之依忠勤可遺領知者也、依如件

天正十一
六月五日 秀吉(花押)
平野権平殿

このたび三七殿（織田信孝）謀反に依り、濃州（美濃の国）大柿（大垣）令（長官）の陣に居り候ところに、柴田修理亮（勝家）柳瀬（滋賀県余呉町）の表に至り、罷り出で候条、可（べし）に及び一戦一騎駆け馳せる向き候ところに、心遣い深くに付而して早や懸けせるにして、秀吉眼前に於いて合わせ一番、槍其の比類なき候条、褒美三千石宛行ない訖（おわる）、弥（いよいよ）奉公に向かう後これ忠勤の後領知（知行）を遣わし上げるものなり、依つて件の如し

天正十一
六月五日 秀吉（花押）
平野権平殿

平野氏の紋所 丸に三つ鱗/九曜 (桓武平氏北条時政後裔)



●本誓寺（ほんせいじ）

浮照寺の北隣が念仏道場大和 25霊場、平野御廟所、浄土宗知恩院の末・慈航山本覚院本誓寺です。創建は鎌倉時代、1316年（正和 5年）花園天皇の勅願所として本覚院と号し、もと八幡町にあり、賤ヶ岳七本槍の一人・平野権平長泰が五千石で当地を領して、教行寺退去の後、1647年（正保 4年）二代日長勝が現在地に移して平野家の菩提寺とし、1845年（弘化 2年）知恩院官尊超法親王・有栖川宮に有縁の染筆額を本誓院に賜り、本尊は阿弥陀如来立像です。

境内の墓地に平野家二代と九代領主の霊廟があり、二代長勝は、長泰の長男で、1603年（慶長 8年）山城国伏見伯耆町に生まれ、1628年（寛永 5年）家督を相続して田原本町に陣屋を築き、町を整備して菩提寺・本誓寺を建立し、領内の充実を計った名君で、1668年（寛文 8年）66歳で没し、本覚院廟が霊廟です。また、九代長発（ながゆき）は1829年（文政12年）家督を相続した後、駿府城の加番（※）を勤めて、書にも通じ、大和三筆と賞賛され、多くの書を残し、1853年（嘉永 6年）40歳で没し、広徳院廟が霊廟です。また、外様大名平野家は、慶応4年（明治元年）やっと 1万1石になりました。

（※）江戸幕府の職名。城番を加勢して城の警備に任じたもの。大坂加番と駿府加番があり、ともに老中の支配に属した。



十一面観音立像



本尊阿弥陀如来立像



聖観音菩薩立像

●浄土真宗本願寺派「浄照寺」

当地は賤ヶ岳の七本槍で功名を馳せた平野権平長泰が田原本他六カ村の地頭になったけれど、長泰は終生江戸詰めで、富田の真宗寺院教行寺に寺内町の経営を委託しました。そして後田原本に陣屋を構築した二代目長勝の時、長勝と教行寺の間で軋轢を生じ、教行寺が箸尾（広陵町）に退いて、長勝が跡地を二分し一字を建立、西本願寺第十三世良如門主に寄進して円成寺と称し、後に、1749年（寛延2年）浄照寺に改称、西本願寺別院・大和五ヶ所御坊の1つ田原本御坊として、県下に72カ寺の末寺あり。

また浮照寺の本堂は、1651年（慶安4年）創建で、古風な面取り角柱・小屋組など当初の建材を多く残して、内外陣境の組物・蛙股（かえるまた）、向拝の木鼻・虹梁などが美術的に優れ、江戸時代初期の特徴をよく表しており、真宗大規模寺院の典型として、奈良県の有形文化財に指定され、境内を囲う塀は門跡寺院として五本筋壁の土塀が許されていました。

本尊は阿弥陀如来で、寺宝の親鸞聖人絵像および梵鐘は、大谷本廟より拝領され、本堂正面の表門は、伏見城の高麗門を移築しています。また、明治10年には明治天皇の行幸、明治23年には昭憲皇后の行啓を仰ぎ当時ご使用の書院が今でも現存しています



阿弥陀如来立像



側面

参考文献

- 唐古・鍵考古学ミュージアム 展示図録 平成18年 田原本町教育委員会
国史跡 唐古・鍵遺跡パンフ 田原本町教育委員会 文化財保存課
歴史のオーラがみえりまち 田原本パンフ 田原本町役場振興課
奈良県史 3 考古 奈良県史編集委員会 平成元年 株名著出版
奈良県史 5 神社 奈良県史編集委員会 平成元年 株名著出版
奈良県史 6 寺院 奈良県史編集委員会 平成 3年 株名著出版
平野長泰と贄塔寺 岩井重幸 平成 15年
ヤマト王権はいかにして始まったか 桜井市埋蔵文化財センター編 平成 19年
田原本町教育委員会
笹鉢山古墳群 平成 17年 田原本町教育委員会
黒田大塚古墳第2次発掘調査概況 昭和61年 田原本町教育委員会
田原本町の仏像 昭和59年 田原本町教育委員会